雁の首に金を懸て迯行する事
并愚民の質直褒美に預りたる事

文化八年未の年の事と覚えし由勢州神戸宿の東の
隣村に村名ハ伝失ぬ久兵衛といふ老農有て暮し困窮
に及び纔八両程の年貢の金に差詰りて名主より
日々厳敷催促を受れども金子の才覚少しも
出来ざれば如何ともせん方なし当惑して居ると十六
歳なる娘の見るに忍びず今しばらく待てと金子の出来
べき術もなくなれバ行末を思ひて勤奉公に身をうりて
年貢金を納め老人へと進めて孝をつくすに娘ハ不便成事
なりとて両親を納得させ兼しかど年貢金の事
なれバ名主の催促をこらへしかバ是非なく娘に
勤をさせん事に成同国一身田の（三里程神戸の方高田専修寺の有所なり）旅籠屋
四日市宿市郎兵衛といふ者の方へ娘を同道なして三ヶ年
金六両弐分にて売渡し（飯盛女と唱る売女なり）金子を請取て銭布へ
包み懐中なし彼是引合に手間取しかバ暁を待居る
急ぎて帰りけるに右一身田の東の方の
中野村の地内を通り掛るとき菜畑に何か縄の張
有内へ雁の数羽下り居て久兵衛の間近く来るを見て
立上り迯行と一羽の雁その縄に
足を引かけて迯さまよひて居る故見遁
しかたくいかりと見定せバ近辺に人もあらざれば畠へ
入行と引ぬき件の雁を手捕として兎も角もし
死るに其内の跡より人の来るまゝ登あらまほしく

思ひむりよ爲と嬉へ〜しの紙布の紙とり〜丈雁
み貢と縋つとのげ長まよ道と急ぐよ形長まの
紙解〜長よ縋ひ〜歩〜纂る敵〜結び〜急ぎ
逆行べ〜〜腰とうぐめ〜茅蜩の紙と結び居る間と
爲ハぢ〜〜〜のぐさ居〜かの紙布と首よ無へる
ものよ嬉るのり出〜り急さ丸押ゆべ〜〜思の
爲と〜〜爲ハ嬉と出る〜〜恵よ祝とのの〜〜じつと
三形無りくる丸思とど畑へ死ぬ〜長さその行と
引援〜潮〜一ッ打〜〜ぢと僅よ尾先とかもり〜
打たとバ丸間り爲ハ遠の空へ死より唯一のよ長の
〜とさ〜〜死り〜り如何〜とものよ汗と拾っても
仕〜〜なるぢと白子〜津との爲根よりと急ぎと

思ひ〜び爲の踊と急〜ひ〜〜遅り〜れども爲ハ忽ち右
根〜りのりさのうさよ〜のふ小山の松林とるるの間へ載
形〜〜丸間よハ形ちを見〜ぬ拾よ風呆〜り〜長湯ハ
長蜂〜地よ御ま大声と出〜〜男泣よ泣蜂めども
如何〜〜〜仕方形〜唯〜仕よ〜形る〜〜死ぬべ〜〜と思へ
ど〜〜蜂や娘ハ〜〜沢ハ舞べ〜〜〜さまバ一先宿へ通り
〜事と吐〜〜〜兎と角もあせべ〜〜と心と丸恵〜
潮〜〜我の〜ッ前り〜り村と浮り来る〜〜蜂ハ待業
て村〜づ〜〜〜逆り〜ぐ居〜〜首尾ハ如何〜て消で
思〜〜祖の金〜風るやと尋ら〜〜〜と消入〜〜心地
〜〜宿へ通り〜〜後源〜〜〜〜拾と〜〜〜の沢合と
語り〜〜〜〜〜蜂と〜〜〜泣出〜〜年来音数

なるべしかの故自然と毒虫なる事乃出来しと
天罰なるべしと悔めどもと仕方をうしなへ又長い長い
忙然と手を出まつ流より外の事をうしなへ養生も極
乃事どもと成よ国所より二里半と小乃方日市崎
の漁人伊兵衛朝よ南りに赤州よ起出例乃ごと
漁色とさしに漁りよ出るけ彩るよ漁色り色
有色多くむと居石とおくよさ所りの河さバとり
ふしハを捕と彩ち事と有敵兼道ゆく狂り
石とニッロッづ拾ハ入まつ彩事するが朝とちよの
儀り居五羽あきるよ居るまく例乃ごと石とおに
歯ぐぐぐ居ハ鷺ぐぐ三彩と又狂けく一ッおども
河ぐぐぐ御るよ右居乃内一羽三彩ぐぐぐ時ぐ居る故

如何成事うゝ不審り思ひうゞゝとまつ後ろへ出りて
急よいの屋を追よ速て追ゞゝて僕の小漆の中へ
追込遂りを捕こうゝゝ〆数ゝゝれバこゝめ何よ
前よ何ら縛ひるこのかりようゝれバ紙布之中をるま
金云ゝ彼ら宵ゝまゝ大よ脱びを日ハ漢りを止よして
急ぐ内へ持海り事の拵を異り女房よ性ゝて
此金ハ金ゝ天ゝり拔りる金之逃脱ぶ事濡りなし
を時女房の云よハ去ゞゝを金ハ敬こて宵ゝめ何へら
前り付亜こうのうべゝ為ゝ見ゝへて紙布を
ゝゝ金を改めゝゝ紙ゝ見るよ中よ書付宵四日市屋
市郎兵清の女を買ゝの書付之此書付ハ金ハ
ゝるゞゝまゝ急ぐ吟味ゝゝ逃ゝのへと勿もども

天ゝり我ホり楽りる金ハ元亜こて宝ゝ
ゝゝ勿も亭主と網拔せざるゝゝゞゝを賣ゝ云事ハ
紙ゝ雑俵の事之改ゝゝ亜金よ脱ゝゝ俵ゝ
女房の誘るりまゝせたもバ吟味ゝゝ逃もべ
や支探り見るよ四市屋市郎兵清ゝ云ハ一月四ゝと
亜に急もこうのまゝ金を考ひゝ方ゝゝハ俵ゝ心ぶ
ひをゝ居ゝゞゝまゝ今ゝり亜よ尋行のへゝ
女房ゝまゝやうに無面を拵へ丈を出ゝ者ゝゝり
ゝもゝりいの漢丈ハ市郎兵清方へ尋行ゝ賣金も
明ゝゝよ志もゝる五亜よ久兵清方へ脱りて見るよ
表ゝゞ戸ざゝて内よ老丈婦親ゝさよ流ゝ居ゝる
拵子之俵ゝ屋の前よ金を付亜ゝ屋やゝ尋るよ

う報〳〵の次第をくわしく言ゆゑ主殿ハ
我ホゴ長補と成るよ前よ紙帛と申〳〵居〳〵金子ハ
四日市屋市郎兵衛の書付も是故一月四ヨリ尋仕又ハ
まで態〳〵尋来りこう金子と更より強へよ〳〵紙帛を
出し〳〵ども老人夫婦ハ涙ヨリ思ひ〳〵ぬ事なるもバ
儘と法とのこと〳〵志ぢ〳〵言葉をう〳〵相ハ先指なる
事よりや四源切の原言語よ〳〵兼賀羅を事〳〵
元式金ハ我ホの金ゴ〳〵屋の前よ付置〳〵屋よ主
主殿と捕へバそなたの金ヨリ御主ども我ホとゆゑ
ヨリ入用の金よ〳〵既ヨリ主人ようと死〳〵も
思ひ居〳〵の証の紙且ハ遍〳〵四源切よ〳〵持来り強り〳〵
事故事ハ数主中〳〵〳〵まろ元〳〵源ハ漢文へ
逆〳〵ハ是と中〳〵清〳〵ぎ殿〳〵ども元そなた
の一度捕のひるのヨリバそなたのうまども我ホゴ
捕〳〵の事なるバ申ひ亜べ〳〵金ハそなたの金のんバ
我ホゴ〳〵善〳〵〳〵辞退〳〵事よ〳〵〳〵〳〵と
多〳〵年ヨリ〳〵逆よ貴ヨリ代〳〵〳〵ハ清漢文ハ武蔵の
金を中清海ヨリ〳〵〳〵事源〳〵式事逆よ領主へ
吹え源文ハ源切よ尋ヨリ〳〵逆〳〵来り〳〵事を感ど
ら主〳〵主黄文黄文茶懐と襟黄文として下強り又
久兵衛ハ間違〳〵竊ヨリ殿と捕〳〵る罪ハ申ぞへら主ど
〳〵源と貴〳〵まで年貢と出さんとして保紙のき
申黄人ヨリ金の主ども義理と無へ〳〵殿〳〵辞懐〳〵る
事ども〳〵感ども主〳〵是と主ざ〳〵黄文下〳〵

踊りしと云ふ一條ハ戯場の作り粧云乃ものゝ事なるべしとぞ九よりのゝ我知音中村何某主演ハ實方清乃藩中より主時乃事ゆゑ近邊故現りし事と見受しゝゝ覚え居ゝ奥に吐せ〜ゆゑ事也

耳乃大ひ成人乃事

天保九年戌乃春向島木母寺のゆゑ〜ゆゑ前乃方よに乞食姉乃者人のゆの内と乞居ゝり泄者面姉ハ三十有余ゝ見ゆるとゞゝ鼻乃大さハナ三四歳乃丁雅程ゆゝ右の方耳翁殊まゞ大〜厚さ三寸斗りゝ中六七寸ゝ有長さハ一尺四五寸ゝ有〜着座なゝ居ゝ耳たぶ地と摺程有ゝり其色紫黒ゝゝ肌もぶゆゝゝして全〜病氣ゆゑそのまゝ人々ゝバ病と

耳よりいるこの〳〵貝入えさう婦人病とまるこの形りのく
もるさまを画きさま〳〵ひろう拓のかゝハ成るこの色
まゝるものゝ〳〵漁〳〵亭とまるゝハ生ざ色た一亭病
ゆゑ名よ記〳〵亟ぬ

龍の卯　英雷の巳の事

東都市谷柳町の渓さよ根来〳〵云所のり　柳町より馬場下と
よ所の方へ山所り根来山鼓恩寺〳〵ハ言宗の寺る
この寺の住僧英鵬阿闍梨ハ予年来の知己之或時
高寺り龍の卯〳〵云ものゝ〳〵格別の付宝ありこの
卯〳〵ゆゑ名ハ水を出やさぞや〳〵尋るり雲気
三日ゝを雲よ湿雷を伴〳〵雨天の気ハ巳ゝ川ぽりと
湿りひとの事ゆゑ名たり〳〵其巳ゝを大〳〵ゝ成やさぞと

尋ゝるに成程成長つゝせ〳〵この言へゆゑ名吏ハ龍の巳
り〳〵ゝなり〳〵攻〳〵龍の卯の形り　卯の刻ゝ故有〳〵龍の
迅雷風雨の日を待〳〵稽ゝこの之を時ハ殿堂ゝを崩〳〵
大木ゝを倒ゝこのゆゑ人跡の形き深山へ捨〳〵ゝ
〳〵宜〳〵ゝるべ〳〵云ゝ巳バ左〳〵そゆゝん去形ぐり
を卯今ハ死せ〳〵ゝ消ゝるこの言へゝ巳バ吏を又
物何拓の沢りや〳〵尋るよ外り澤〳〵ゝ事も
なゝ〳〵ゝ〳〵ゝ三十年程の以前拙僧の小僧の頃を
前よ云ゝ〳〵ゝ少〳〵雲り〳〵日ゝを雲よ湿雷ゝ
流〳〵ゝ巳の光澤も〳〵ゝ宜〳〵ゝ〳〵ゝ後の〳〵ゝ雨天
の日ゝ〳〵ゝも湿雷出ぬやうに成なゝびり右の巳を
仕舞亟ゝ拓ゝ〳〵ゝ成〳〵ゝ巳ゝ〳〵ゝ兼ゝ屋ゝり

たりゆゝしきよしもそれより山寺を長じやさび寺の
今猶ゆゝしくて死せしものゝ言へ悔りゆしとの言へ
具しり吹き立り和尚を援天保八年丁の巳六月廿七日
右玉と見へ世貴りんゝゝかの寺へ熊ゝ彩ゝ龍の玉
一渡の事をたのゝゝに侍僧より付ゝ恵よ有ぎせ
見へ世長うゆゑ宮ゝ来り左よ志るゝ置ぬ形ち汁り
の事彩ゝ答ふ志成ゝ遠そざる拾り
彩ぬ絵玉ゝも拾の光澤の拾ふ志何とも彩ゆう
彩ゝゝ藏念なり和又出玉を沼ゝふ事の世来を
知りゝゝ尋ゝ久玉ゝも志ゝ傳来ハ彩りゆゝ
裏ゝる帝よ誕玉の名志ゝ玉の志りゝ長又
弥念の事よゝ彩

玉大き極り
四寸八ト寸
六ト志ゝ玉
ゝも條絵
長ゝ見へ
元大き極り
ゝ長の
ゝり見る
なり

裏帛ハ
根来山
報恩寺
什物寛政八
丙辰歟次六月吉日　施主　村井氏と有歟ハ天と云
字の古字なり

竜ノ卵

右玉の形ち鶏のごとくなるもの〻ごとかく平めなるて熟解
大さ圓の如く豆位す八ト横を僅二ト徑を縮〻位す
六ト徑有又玉横を位す徑有〻玉質雷斧石のごと
俗ハ天狗の爪と云ふ〻利なるのハ見へる色ハ青多ハ
かゝ藍蘭の色を佩うり色又金〻雷斧石のごとき
色合なるもの〻光澤の有幸ハ雷斧石ハ
かゝ〻ぎやまんの光沢り似うり和ハ海濱ハ河
自然生の堀の圓りのめさ墨白色のもの一面り
まゝ〻墨まり居〻ハ墨色のもの〻自らたげく
面みを居ざる所のごと〻表面り有〻を而
うつ〻きを質潤〻を其白色のものハ少を深き
もの〻金〻薬ハ鶏ふうりと云物ハ似うり有の

二面ハ白色乃如き〳〵まゝ成居り阿闍梨乃如き
り〳〵三十年程以前雨日り濕氣乃出る頃ニ乃
玉貫無雜〳〵計り光澤有〳〵ふり〳〵いつゝな〳〵
光澤ある〳〵ぞ満まゝ有る〳〵〳〵まゝ〳〵と新まで
光澤有り玉時乃黄色思ひ量らまゝ〳〵〳〵よ〳〵
奇思と〳〵らまゝり其まゝ成居る白色乃ものゝ
思按り〳〵龍乃膏屎乃類り〳〵此玉を產まゝる
〳〵よまゝれ出る乃り〳〵間り玉れものゝと
思まる如何ようや且此玉と乃る物ハ檜乃間抱り
〳〵〳〵

新乃ごとき形なり色ハうゝ色乃
油塗なり阿闍梨乃抱帯りよ此入物を實改年
西寺へ納ふ為り抱へ玉るものゝ見へ玉時り

此紙乃端を中よへ有り〳〵〳〵蓋ゝさり居ひ
〳〵に今ゝ玉ものゝ面り僅乃〳〵蓋と合兼ゆゝ紙にて抱へる
端り載〳〵有蓋ゝ三ト程上へ〳〵〳〵合兼居ゝり
先達〳〵洗濯定乃通り合〳〵
大さ〳〵ゝり中玉事と今初〳〵發明〳〵ゝ玉事
なりゝ

又同寺よ雷乃玉〳〵云ものゝあり色又見来るまゝ居丸
面色ハ大雷乃物早稲田色へ雷落〳〵ゝ玉而よ落〳〵
有〳〵との事ちよ〳〵〳〵たる年月乃書付こゝ二乃
いゝ〳〵へ色添〳〵仕最面〳〵り尋出〳〵〳〵童て見玉
面〳〵乃吐り〳〵玉後尋出〳〵見玉らまゝり紙程
此玉ハ雷乃玉ゝと有〳〵〳〵何〳〵と見別ぬ玉なり
博識乃論〳〵を待乃〳〵其居此乃如〳〵

裏帛ノ
寛政八丙辰天次
六月吉日
天八
吉家の天
の字なり

下の面り

此の巻
きト紙の
濃きめげ
とまてふ
種なり

竜ノ卵

右雷丸の大さ七寸の通りと想ひ墨白色よりし
薄藍鼠の色を佩く薄茶色の本目の巻く氷目の
巻き筋色なり金ー鴟瑙石の巻く又ハ瑠石の巻く白
茶紺翅の色ー光澤と有ごと鴟瑙のごとくもとき
色る光彩なく色を不と鴟瑙ハ音外者り
ハ去ぬごとくなるよハ頭のさ孫麦ゑ落る時の
さぶるやトの方ー思ーき而り三角のさぶ有く
去りとかーの而そ皮ごを居り何ものせよ見
なるぞるものー雷の玉やー思るもり或人
の云雷斧ー刀ー梃ー碧ー珠ー楔ー墨ー剣ー鑽等
云ての有雷の落る跡よ有ての三味線のばちの
巻くるー市新の焼刃のごとき黒炭なるを雷斧

うるべく〜帝〜〜〜僧の袈裟より掛絡のごとく
〜白色なる〜青と帯するハ雷帽なり〜〜外角のめく
幸さ〜赤鮮り紫色より赤と帯するハ雷瓔なりて
石りのごとくなるよあるべく藻のめさめさまりハ雷墨
なるべ〜と云り左もとハ光金〜雷珠の顔なりと
思さる

古程人より作〜来る事

英姫業の死を初〜遁を避ざる事

稲葉丹後守正通朝臣ハ相州小田原の城主なりしが京都
諸国代職り命ぜ〜ると〜家中のよく勤役の者を
撰〜波地へ陸奥なさしめ給ハ家よ大野与次兵衛と云
家士有〜死〜後まで与次右衛門父の孫と水駒て

童形のまま勤仕なし居〜潮十六歳〜成るが老母
きく〜のごとく先祖を外親族迄も一人をうしなと
与次右衛門と心撰の図よ預り〜京都へ陸奥もる命成
影り〜りの老母の暮養をもてさきのごとく家地へ
母同道の後を預り〜速よ出発して父の
名よ成〜与次兵衛〜云称るり寛享二年乙丑正通
朝臣諸国代職退役の　右命有〜就後国元の城へ
帰地仰付らまと言図ハ光近就後中将光長卿の領所よ
〜城と大き〜家中の面々と引よ色〜廣〜
の〜役人完石大夫と云者主命と請〜屋敷別と
〜与次兵衛ハ屋敷と廣き屋敷と賜り〜住居と元来
与次兵衛ハ未妻子もう〜老母〜武人より〜僕従の外よハ

京都より抱おさうの老婆と人のこゝろ
（此老婆うつて京の
汁田舎武士のこと
なるゞ不幸うつ世よたつきれ妹聟の元より育つて居る
御妻水と慶しく御と
御ハ雲上方まも
奉公ち一緒爰月ゞ〳〵も心と優うつ和哥の道よりとふ次兵清ハ
仕る幸爰へ来ち者きゝ〳〵りうと抱老婆若うて
ハ母子の恢ひ大〳〵うもゝ月と無〳〵老ひ
ゆるゝ〳〵ハ老と者ゞ恢び〳〵幸うゝ〳〵ゝ織り新不慎ゞ〳〵〳〵夢ゞと知ゝ紙路乃
住居ゝ成別深う老婆より別ゞ幸ゞ居時ゝ〳〵ゝ母子の張り合ゝと宿ゞ〳〵ハ和ゞ
幸ゝ思ひ世もるゞ〳〵ゝ者ゞ月ゞ生活ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ先度と見年ゞ〳〵ハゆうの
ものゝ様〳〵合紙張ゞ〳〵ゝ〳〵ゝ幸〳〵者〳〵〳〵ゝ月ゞのものゝと狭合〳〵ゝ
紙路〳〵月行
る女ち
部〳〵人ゞ月ゞとハ次兵清と廣ゞ〳〵こゞち元
ゝ〳〵ゝ幸家〳〵長屋乃間と遠り清り居〳〵
牧更淋爰幸〳〵紙張ハ雷閃〳〵云間ゝと言ゝ間ハ別て喜の
長爰ゞ〳〵ゝ今年と雷鳴の外淋病幸幸と長爰
部〳〵住居ゝ単々一入幸若と恋〳〵と若と心着く
〳〵〳〵幸飛りとなり〳〵居〳〵と居間乃次よハ浦士と
寄〳〵ゝ〳〵ゞ〳〵ゞ〳〵自病乃相居りゝとゝ〳〵〳〵

感れゝる故ゝ次兵清と病居と居り深ゞ〳〵出仕う
ゝりけゝ武病幸ゝゝと一入淋〳〵ゝ次兵清ハ側乃病居
ゝ出幸家よハ老母〳〵老婆とのゝゝるゝゝて居ゝ
部更ゝる頃十七八家汁ゞる見ゝ別ゝ奴僕一人長爰乃
戸と外ゝり明け〳〵老婆乃間炉裏よ焼火して居る
僕へ来り婆ゝ母淋爰ゝ今宵ハ一入幸〳〵ゝゝと
能〳〵ゝゝ者故推ゝゝ間ゝよ長屋へ洗濯よ
来ゝるゝの〳〵幸ゝゝゝ我ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝて
迚〳〵居幸故何方乃人ゝるゞ〳〵間ハ迚屋爰乃ゝ〳〵ゝ
ゝ幸ゝ居ゝ住ゝのゝゝゝ四方山乃相居りゝ老婆
ゝ心解〳〵居合〳〵ゞ部ゝハ居〳〵ゝ国ゝ来り雷中乃
若寒〳〵ゝ淋ゝ堪兼るゝ〳〵ゝ〳〵ゝ四月は

京師醍醐の人形をぎのくる雷りハ別のそるよハ世類紙
なるべしと云老婆驚きて我うさハ今青婦〳〵来りくる
人形るよ如何〳〵彩ふぐ赤つと云ひ居るる〳〵我ども
婦〳〵同よ般男吏は我ハ沢胃〳〵ちり居る形り
婦〳〵ものるる〳〵余年の世とう〳〵後病を大り
文うり海りきん又〳〵我来りれ〳〵ハあ〳〵出れぬる〳〵
ちか年病〳〵に及び〳〵ハ女兵清の老母を不審よ
思ひ毎夜老婆ハ人〳〵物語りとうそ弱り男の声
なりいぶう〳〵き年〳〵婦〳〵老婆より同よ泄とハ
和りやきどもーが長屋へ洗濯の用胃〳〵来る着こと
やせ一泄言へくるとハ今青と来〳〵だ住居と同へて
主故と紙尋ゑ〳〵胃〳〵ハ主歌来り〳〵時老婆

悪毒尋探りするよ実と我ハ世毒の援り年泄て
住る程うるが四月の心正直〳〵弱と能のふこと
なるさま〳〵我と又主仁心よ別〳〵来り焼火よ泄うて
毒者と凄ぐ年〳〵年別ると婦毎り来りぬ御〳〵り
〳〵と害ハうきぐ主ハ婦〳〵恐ものふまぐ〳〵へり聖日
世育と老母へ泄りくると婦ハ老母と実〳〵ものね祖婦〳〵
別ぐ〳〵竜云の山地〳〵そのるの事るるる人重て来ハ
左祖り身と変ぐて人泄ととす〳〵毒力自立と泄る
とのう〳〵ぐ与次兵清の傳孫ととます〳〵仮紙とも進む
拾よ若公又ハ桃柄の老婆と泄へ長る能方仮と泄る
らんよ頼〳〵てこよ〳〵云〳〵ま〳〵疾の文ると待居ると
いはとの毒りかの程化来り〳〵老婆とちり日て云拾

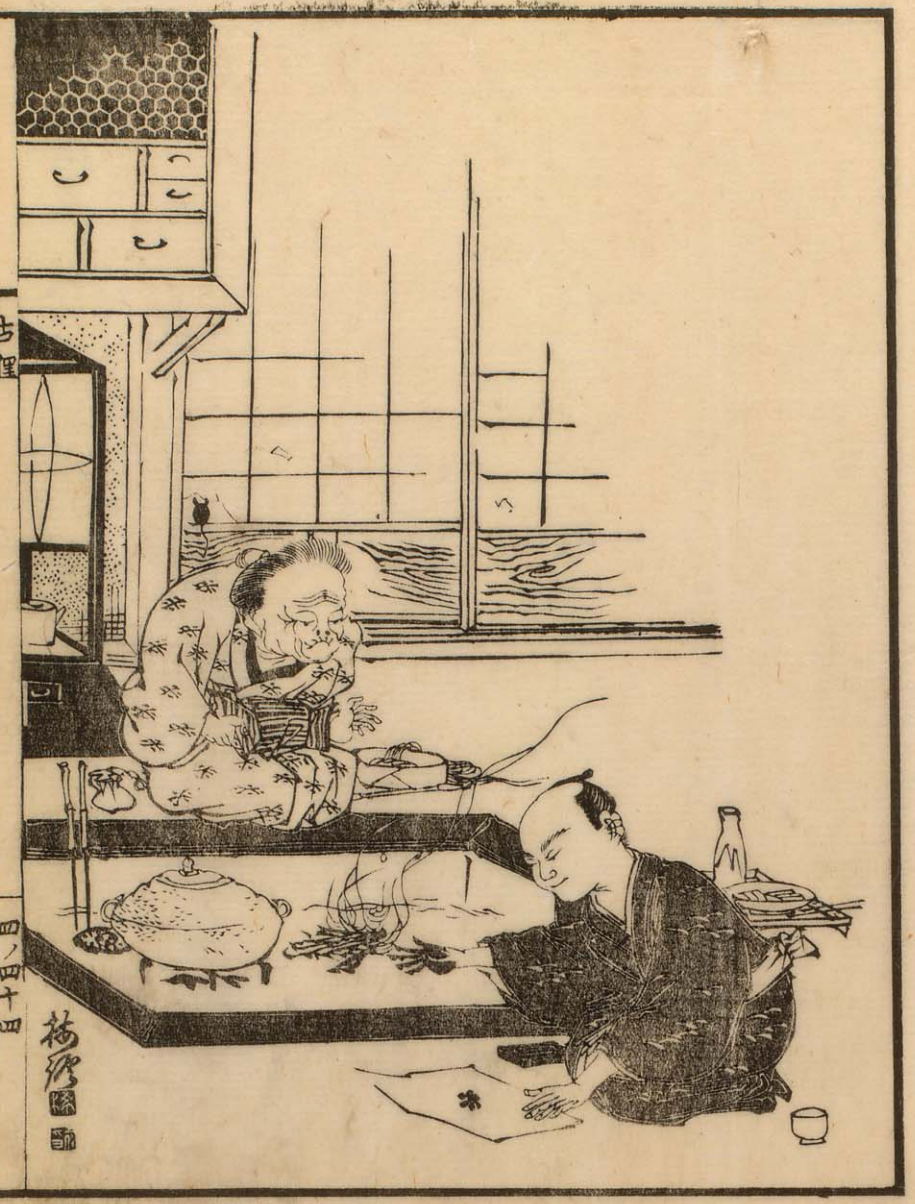
嘆ぜハ心迷ひて仁ある敵今を限りハ家ぞや
与次兵衛殿の立身加増あらせん事を我よ形ゝの心の
待るゝ我に異ならぬ事ハ見る人我ハ武士に日暮を
孫事数年ゝ懐ゝ怠慢一連ゝ見せ申ゝ
今ゝ他の手ゝ水ゝ兵人間よ成度事を形ハ他ども
主頼中ゝ叶ハぬ御ゝ為よ支度貴ゝ人身を支度ゝ
四民の中一ハる武士ゝ生まるゝ稲葉の浪家よ
おゝゝ四郎と成ゝゝ重ゝ仕ハれ時よ若の
四度右よ危疑せゝる人ハ先よ成ゝる事肖べゝ所詮
人間の男ハ何よ成てゝ事ゝ頼ハの他る事ハあるべ
ゝゝ左様の心を振捨ゝ若よハ忠孝を親よハ
孝行とハゝ身を忠迷よ職を守りゝ弱ハ
天道の為ゝ為るべゝ去ハゝ若人初ね義事ゝ
ハゝの時ハ為方よ心身ゝ苦ま弱の事ハ
人るゆ忘光宴と為ゝ感後ゝ さ様侍ゝ
頼を八心ゝゝゝ主様八酒を楽へ打義者合せ 小豆
飯を与へゝ帰ゝ せ主迷具ハ 老母ゝ活せゝ
親人を若八雪中の他然よ拾柴を拾ひ家士
丹時武太夫ゝ ハの歌よ 迷の勤仕を免され歌
勇ハ 宅撥ゝ 若のおをとなせハ主須武士夫母の
病事ゝ 武疾病用よ永迷居ゝ 宅撥と迷刹となり
ハゝゝ主ゝ 先多ぎ延行而よ右の与次兵衛ぶ門前ゝ
雪鞠の級と暗切粗微よ呼ひ ゝ門よ居る与次衛が
僕を頼ゝ鞠の迷と身ゝ人 男ゝ祈義与次兵衛八今宵八

宅懇なるゝん老母もまめまめしく手外家内の取り計ひ事もなくやゝ同り僕言ふ云ふハ何とも四機嫌能いゝへども屋敷の裏よ年来住居る古狸毎夜小猪よ化来りて京都より供して来り居る老婆ゝ中よ呼ばるよ人間りかゝを誓る事四度ゝ或時ハ酒を飲ん或時ハ飯をたべさせ孫娘事よ四度ゝ云故吏ハ急ぎ孫娘事ゝ同返さゝ何の虚とやこゝ云内よ鞠の絶も来りる故り武吉吏ハ急ぎて宅撫をなるゝ先刻よる迄尋させるゝ朋輩の告を聞ゝ急ぎ清前へ出るゝ武吉吏ハ同刻後て急ぎて出る道よゝ大野与次兵衛の門前よゝ鞠の絶をきゝ急ぎ駆付ゝ居りゝと与次兵衛ゝ僕を形ゝ鞠の絶を聞ゝ急ぎ清前へ出るゝ孫娘事を受来りゝ云故吏ハ孫娘事形ゝ〳〵嘆る間をゝ来よる最の身よ入吏ゝて毒水事ゝ連り尋ぬべゝゝ与次兵衛を清前へ呼出さゝ海ゝ家よりの事者ゝ受日頃行て慰む孫娘事を自国迄の事よりゝ受度ゝ願む折柄よる何ゝゝ吏迄の事を今ゝハ中さゝ迄ゝ尋ゝふゆ与次兵衛濃ゝ中やりさまゝ迄ゝ成て兵今武吉吏ゝゝ迄の訳よ御遠ハ四度ゝ聞へども何のまり孫娘事敬先ゝ迄ゝ迄ゝ思仕ゝ先ゝハ親娘朋輩ゝ入へを一切呼ゝ中さゝ迄ゝ言ふを仕ゝ迄ゝ言へゝる与迄若

もたを肴ちんとゝ丈うりを次兵衛の咄しを聞よさ
ゝひ〳〵初ゝ対面白き事ゝ行事竊り汝ぐ宅り
我あを彩〳〵其程の奴僕〳〵成事り〳〵拍清りをるを
見咎〳〵うきま〳〵明夜汝ぐ家よ到るべ〳〵云出〳〵ゝ故
発言ゝ事を彩りゝ儀ハ御るべう〳〵ゝ低今ち塩下ゝ云
四藩代の方次兵衛ゝを呼せよ夜法の四悪び事彩ハ四藩の
ゝ言ざるよ似うを彩り時候を咎ゝ〳〵化物を四藩よ
べ〳〵せらをひゝゝハあまり減〳〵ゝ四儀ゝ〳〵清め
ゝせバ正通拍信ゝさるゝハ方の云事ゝあをゝを次兵衛の
咄〳〵偽よあ〳〵ゝまゝ無賀者ゝ事ゝゝハ彩〳〵見
を〳〵べ〳〵ゝゝゝさるゝ故発言ゝの〳〵ハ御〳〵ハ四藩物ゝの故嘉
ゝ〳〵前後の四彩報を四潤へ清〳〵せらをひへゝゝゝ上ゝをゝ
正通朝信ゝさるゝよハ丈ゝ〳〵ハ必定ゝの〳〵の出べ〳〵ゝ逆
唯〳〵清向へ極同〳〵ゝ〳〵孫ゝ次兵衛の竜へ到〳〵ゝ〳〵に事
極り〳〵ゝを時刻よ到り〳〵近習の〳〵の計機右連らをて
を供へを皆〳〵ゝ次兵衛ゝ門前り待〳〵ゝ亜ゝ若ハ近信
ゝ三軍ゝゝをゝよ竊に次兵衛ゝ家よ入為小ゝ〳〵化
来り〳〵発覚〳〵拍清をるゝ方の間の渦よ清ゝ一号戦
清〳〵極〳〵清ゝを為べ〳〵静ゝよ潜り居らをて程り
ゝ〳〵をまゝゝ大辞をを進めべゝをゝ〳〵酒食をゝ
て数刻待るをゝゝを病よ混り妖怪出来〳〵ゝ成よ
夜ゝをゝをゝをゝゝ来〳〵ゝをゝバ雷中の家若長安上下
ゝを清家今青ハ先酒り〳〵明夜ハ家を動を清ゝ〳〵面
ゝゝめ酒着を潤へ〳〵を姫来るべ〳〵ゝ〳〵帰りゝへを

其跡よてしばし間もなく例の僕出来り浅ましき姿にて夜
今宵ハ八ツの時刻に来られぬ故此行末ハいかゞと思ひ居
しかるに昼も来りまゝしと問ふに僕が曰そのさハ知らざり
しかるや今宵ハ太守家内に取締せられ禁足として
御すまゐしにかゝる狼藉の貴人に聞えて我ら共
へ通ひきたるにあらざれバ其の帰らせらるゝを待て来りけるなる
語りたるゆゑ大覚焼又曰たとへ太守の御入ありとも其夜にしのびて
のがらるゝのなりとも何も支障恐懼するにハ及ぶまじ
望みとも其思ひの来るべしと云ふ夫ハ思ひもよらぬ
事なりたとへ百度来りとも太守のまゝまゝて内を
百度とも出べきとぞ云ふる故望月兵衛出仕して
表の説を奥に言上せしうぞ御身ハ我ホが見えぬ事

叶ふ道へもどもよ主君ハ思ひ止りたまひしとぞ夫より
年月を経しと僕の来る事始めのごとくありしが或夜
来りて一向に物をも云ハず只常に替りし容貌と
しく楽しむ食物抔進むれども食せず云ふと心痛
ある様子に見ゆる故焼も不審に思ひ何故に今宵ハ
常に替りしぞ心配なる事のありとも語りて問
ふともバかまへたまふれバ我運已に尽きて明夜ハ猟師の
為めに一命を落して極めて今迄年来一形ならず
芳志に預りし事の御礼言葉にも尽し難し是迄語る
べきも明もなくさせる御礼もなさず是限りなり
死ぬる事の跡りしゆゑよくよく落涙して明日ハ昼の内
小鉄砲の難あるとも是ハ遁るべし文々昼夜の危きに



古狸

四ノ四十四

やめどこと見と見るべし。疾りへ罵よ怨りて死を
以時と見るべし。猶る故老婆同じ。因て支配未来と
能知る通力有て形をとへ変ず云語をへよ聞る
事なき変化自在乃男を拾て主罵り怨る事を正拍
ハ生ることを又たへ罵よ怨りて悪ことを卵のごと卿を
なさう支ずと志ろと張うのごとき罵よ怨りて死孫を
ひるへいの事我ホよハ合点ゆどとへのへバ天運の尽る
所を如何ことを悲ほ及ばざる事なき罵り
怨るとハ知居ることを如ほ知りてハ心懲ることを
覚へえなく強て死せん事猶ようけるなく知居れ
どと道るよ而ち一気早今宵限りよ以家へも呼び
あるまじ四人へを宣孔と下長らまよとなる志ることて

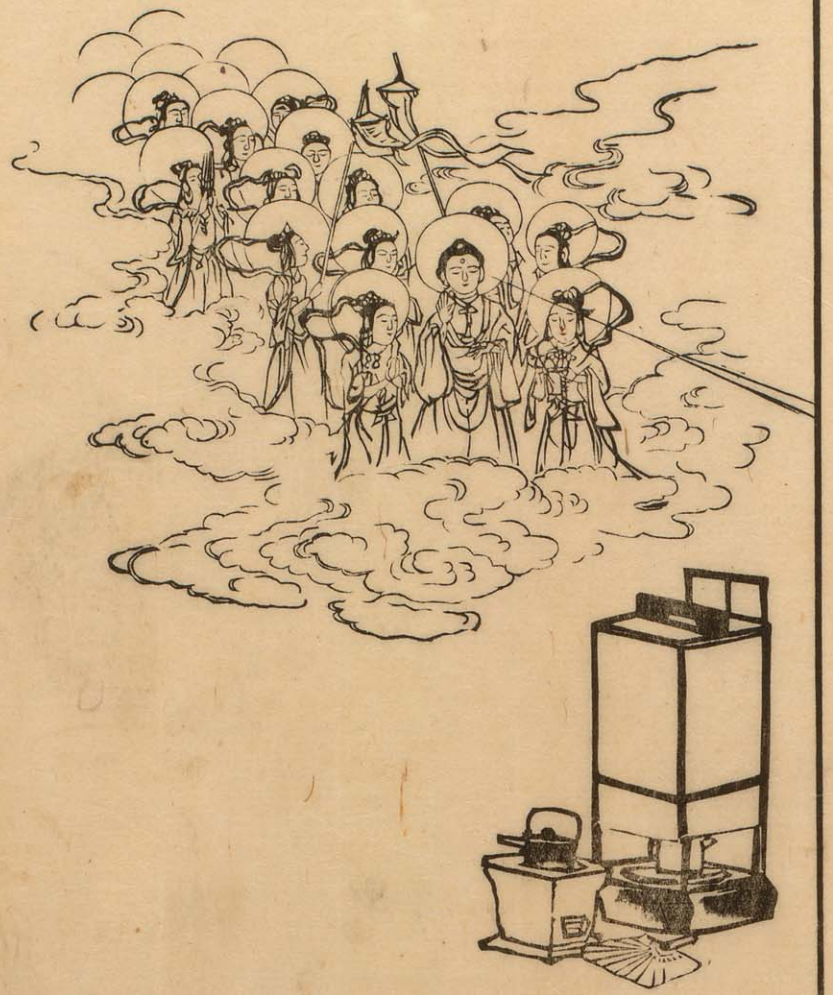
語るに老婆も共に名残惜しく且ハ親の毒りし思ひ深
死して後其尸に而背やして向ふに出行けるに古き狸の尾の
掛て向きかゝり残りて置かれ死骸一月に紙にて是を
戸に折りしと云ふ斯年月心易くちかふ一故実にて語り参らせ
一ツの足を残しくべしとて紙墨を乞ひ右の掌に墨を
ぬり紙に押して見せしが全く獣の足跡なりと是ぞ那え
の手形なりといふ老婆曰く過ぎし世の事に今一紙得させ
よとて乞ひしに何ぞ惜しむべき事とて下ハ二ツ跡を残の
和睦とて云ふて支切に去りて見えず後に老婆狸の云ひ
しする事ども思ひて去る子孫に語り清ぶ母に告しが老母を
さまざまなり萬に思ひて翌日近邑の獣を驚かぬ市店へ
人と近いし寄中狸を薬用になして事背まで一月り

狐なりし尾先の白かりしを得んとて価ハ望みに任せんと
觸置せしに其翌日只今猟師の手より得たるハ御注文
通りなりとて持来るを見れバ縊れ死せしものと見えて
惣身あり狐なれど尾の末ハ白く常に聞くところへ
去る時ハ縫女抔ハ化して遊戯する者とて奴僕なども語り
しが死せる形を見れバ一際ちいさくて斑毛多く如何
にも年経る古狸とこそ見えけり老母も怪しと取りて希有
の思ひをするに高田へ所替の後菩提所に頼置ける
同所東雲寺といふ寺の現住へ有し事どもを具に
語り畜生ながらも二人へ不便の事に思ふまゝ厚く弔ひ
呉れと頼みて施物を添て尸を彼寺へ送りけれバ住僧も
奇異の事に思ひて人を葬るごとく念頃に回向を

城老〳〵ハ老母を抱び〳〵に程乃西よに寺に石塔を
建〳〵今程市を訪〳〵有〳〵うん寺後元禄十四年辛巳
稲葉家へ　台命有〳〵下総乃国佐倉乃城を戸田家と
紙釜守忠直朝臣不届ノ〳〵事須ハ元年殿御乃殿ハ死〳〵西
老母ハ存命ゆ〳〵母子佐倉へ参り〳〵さぶらと未端士の屋敷
是〳〵ゑる内城下乃山崎といふ所の名を又云清といふ
この家り云浜兵衛藤富也に時佐倉乃勝龍寺乃
一栗禅師ゑ次云清乃老母ゑる也ゑ吏也〳〵和泉を雅
覚〳〵居〳〵此さまゑると添の伝友〳〵云人に拘泥りの
に浜よのこ訪り居〳〵事添乃弦ん事を思て宣度
四年甲戌乃春よ参り〳〵愁り書記ゑ〳〵也ゑる記添を
訪〳〵家〳〵也ゑりかの程老婆〳〵和泉りハ
計〳〵西ゑ話を多ゑるべさり御事乃有ゑ
ぶけ程〳〵訪りゑるハ訪り多ゑ中ゑを又〳〵幸ゑる事と
思ゑる事に書巻を筆記成〳〵也事意義ゑ有光角
和毎要義記ゑ〳〵也ゑ子厳乃昔を国前ゑ立げ〳〵
に書を奥事年中乃後宝暦年中ゑ参りて伝友乃
事を記の弦果ん事を憂ひ〳〵筆記ゑ〳〵也ゑるハ七十
年後乃事ゑ〳〵〳〵右の筆記ゑ〳〵ぶをハ今ハ弦〳〵和
ものゑる事ゑ〳〵和又事伝友乃筆記ゑ〳〵也〳〵寶暦
四年乃後ハ今天保十四年ゑ参り〳〵已ゑ九十一年乃星霜ハ
弥生ぶを〳〵歴法〳〵て右ゑ記〳〵也也〳〵り筆記せ〳〵後
事ハ時ゑ事ゑ予に書冊ゑ文化に未国前ゑ見吏乃事
乃〳〵を多〳〵記〳〵也ぶを事ゑ〳〵祝融乃吳とゑへ

発心をだに八歳の後よりおもひてを目前に見るごとくこゝ
ろ柱なりゝんと思ひ寄給へ中なごり尊と物〳〵ゝ
を事実と記〳〵亜事冊中を見〳〵量り知ふべし
寸法五の巻より記〳〵亜奥州高撥地〳〵光物の死後を
知居〳〵記逝ざり〳〵〳〵合〳〵同日の涙之
西應房小院の来迎を拝して往生をなす事
市谷若町自證院より西應〳〵道心房者若き時ハ特人
と止数心〳〵此寺より道心房と称〳〵安楽より生涯と
言〳〵此美女より色〳〵る事ハ三の巻より記亜〳〵
吳女を多〳〵援き業
六十有餘より〳〵〳〵と
分健うみ〳〵朝と男共かと早〳〵起出寒中と入と
手鞠ばけ〳〵まめ面〳〵寺内の掃除なごとを〳〵餘力
ゆゝ他事なく念仏をやもの〳〵〳〵亜安泰の行着
〳〵ん後〳〵後悔〳〵年を元天保の末より〳〵〳〵させふ
病症となり〳〵〳〵久〳〵光病より〳〵却居而陰性気なを
づさ病より〳〵なき作親屋の者と恒常の事〳〵反把
弱させ亜〳〵るより或疾青病のものより相和〳〵者ゆ〳〵さ
事ゆり唯今泳院小東来迎まり〳〵〳〵り相〳〵者るまり
ゆ水の湯と元吳より〳〵云出〳〵〳〵むつく〳〵記亜り〳〵
さ〳〵ざるまり〳〵何ようとせよ〳〵言より任せるごとよりて湯を
元老〳〵云なごり〳〵餘りの病労ゆて到光老せ〳〵や院間
設人〳〵を遠まるゆ宣〳〵〳〵歌中奥にゆ出〳〵るまり設人
病床より〳〵りて汎ハより西應房ゆの来迎と拝して者雖
ゆり居〳〵り光老よりや〳〵より〳〵尋撫るより老より〳〵ハ〳〵
まさ変あの如〳〵私の目より八拝まるさせまり〳〵〳〵り
餘人ハ拝〳〵ゆハゆるやアハ者ゆ〳〵〳〵事〳〵何乗此事を

眞よりも院家様の四聽より入俱り四收びトさるべしと
感涙を流し〳〵嬉しがりつゝ面を振〳〵ながりさる
神相と舞るよ前よ觀音勢至乃二菩薩来臨まして
て西方よ八共五菩薩圍繞なり給ひる蓮なり見給
曼荼羅乃お好なり尤共五共五曼荼羅なり云事え
かり西應八初〳〵ざまでと生者さ面を圓光とのゝ事さまよ
遠ハざふハ五思議ゆりゝ心消〳〵泡沫り尋ちりゝ
如来八大多の雲よ乗のゝ〳〵降居りて花のやゝ向よ多の
雲よりゝどゝ紫乃雲よ乗〳〵来を降八四方花黄金乃
地肌よ〳〵白毫よりハ赫耀〳〵一入光明とさゝのうせらを
想神光り輝さの八四方さ四面さ云る如来と各別の
四れ遠よ〳〵望るよとのなゝ中〳〵言葉よ表り言も事



能のごとく成ぬる石僧智識云々と来迎と称する事ハ
容易なるべきなり我ハ此ごとき来迎なり逢
奇なるハくるべしと言ふ事ハ必ず法院家柳（門上ゴ
さるべしと收びする執権と番衆と所ゝまき数
のりゝと称まるとさせ除ひする事と見へたり右ハ
来迎と称する人の回記なる虚空より音楽ありて
ありもさなるべしと此西應房の耳より音楽ハ聞えず
只番と慧せざりしの事なり相此ハ来迎の方
より来りのひしや空ゝ西より来きたりて西應房
西の方より向ひ称まるなるべしと問ふかよ
いなしこの方南より南り居しやそ後ハ髻髪ありと見ハ
陸奥兵之所ゝ云人右設人の長を懸よ加り居ゝ見安

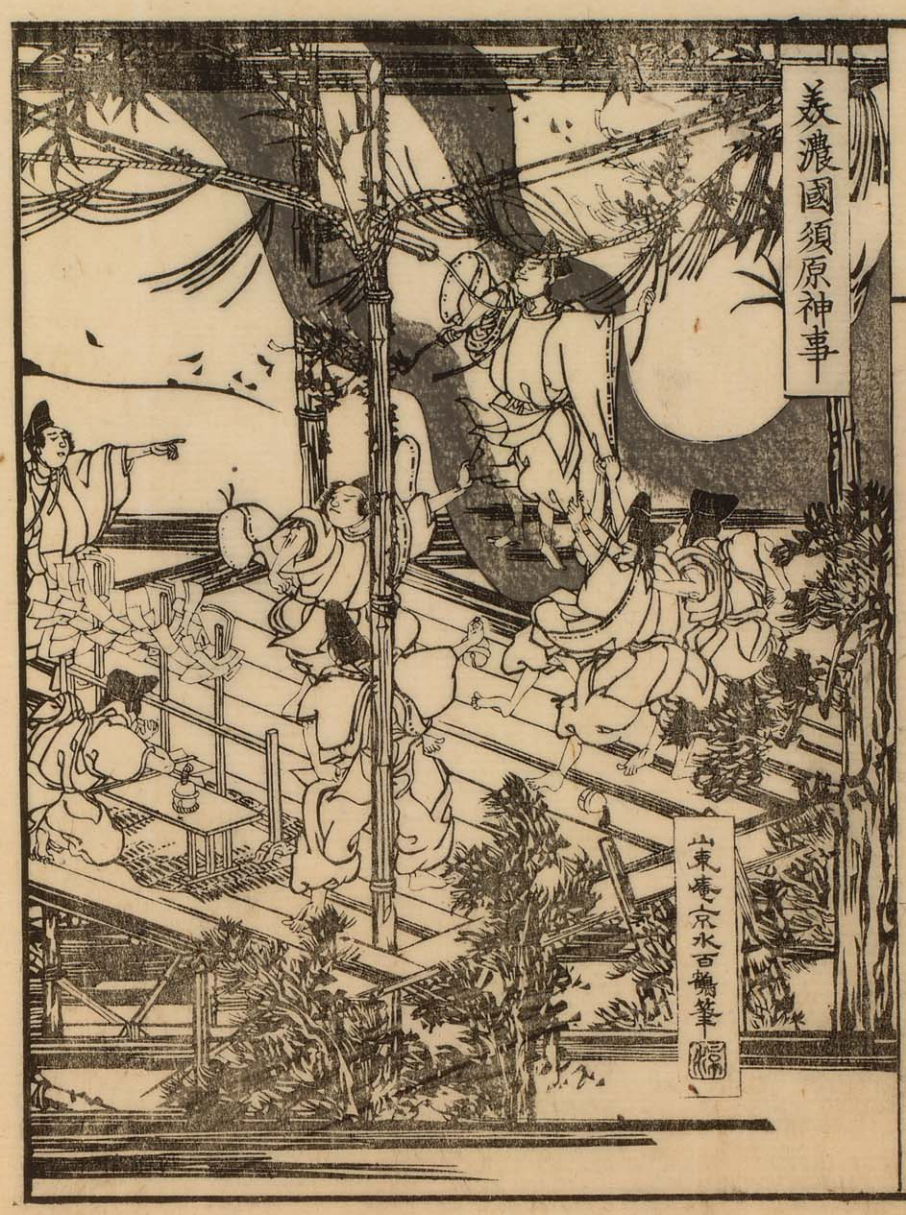
なしくるか物淋く此捨木を年来入魂りし高弟實直
篤学の人格性成就しゝ右西應房ハ其翌日天保十二年辞
十月十二日苦痛をしれ〻出行よりも正念往生をとげしとぞ
浦山敷事と扨此西應ハ壮年の比より職人を業とせり
居しゝ多勤頭の命をもしもし事ハ数限りもなき事と思ひしかれ
斯来運よ寛りし八行ら善行のよくも積し事なやと兵三郎
り尋ねるに素より老年よ及びしゝ道心を発し剃髪をしての
僧のまでを佛門よ入りし随しゝ入も積して後ハ毎朝院家の
勤行の末席へ加へらまして院代初め弟子と供りし勤を
なさんとまも隆人と遠びしゝ其さまいうとも信実よして
殊勝よ見へさるよりして終に院家の聞ゆる入居て
後にハ一入目を懸てまさり殊よ此西應房ハ勤て人とハ

違ひし人の悪を語ると云事なく其當人のなき悪を
麁相とバ西應房の過ちを咎へ叱かしも顔色かくハ
れきとの云訳ハせずして己のなし悪る事の様よ
恐れ入居し人の悪をもかむり並て其名を顕さずまたより
遥後よ其事実の顕るゝ時よ先自身を叱りしを
見る人遠く此の徳ハ餘人の成し悪る事のなしと云へぞ
何ゆとも及ぎる事と存れが誤り並り人ハ事毎よ淋と
恥かし混並せしめど云事も無く至偏人の及ばぬ事よ
しし實よ見ぬの事ハ歴くの出家沙門よても増りける
事と思ひ並りしの物語之全く皆のある廣大の功徳
ともを瓶く如く佛菩薩の来迎なりしすひとる事と思ひ
此西應房ハ元来職人のたまる果りや我慢ハなくまども

年貧強勇ゆゑ〳〵右病死の三日年前よりこと社の外大病と
炮の腰もぬけ〳〵久〳〵難儀せ〳〵年をゝくも苦悩無成就も
見をびし死前の病苦ゆゑ〳〵病苦もせず九月廿四日
相もるさま無よ浦後の相ゆゑ八文よ苦痛なり〳〵とこ
ろ〳〵も浦山安往生なり墓八自性院の墓の内り
ゆ〳〵西應法德〳〵法名濃〳〵なり

義濃國濃原神社奇事不思議霊験の事

義濃國武儀郡濃原の神社八郡内の門前〳〵なる和より二里程ゆ
南國の大社ゆ〳〵式拾二石餘の御朱印地も相願ゆ
どこ田畑の外山野とうけ〳〵八社領の外廣〳〵法〳〵
社家も多〳〵神霊赫〳〵なる御社ゆ少なく新勢ゆ
り〳〵前よ執役となせ〳〵名居何某なるゆ此り氏御社の


羨濃國須原神事
山東庵京水百鶴筆

神事八十月晦日より長ごろの参詣を生る先神人川へ入て
七給之後振離を取り後神迎の神ずとうつふく急り初
もきまづ風落ち有る等神人を夢中に感て
天へ引揚る故に勝想り漸に面長ず不思議の事
を聞る人と二人まづ遠り天へ引揚仕舞と中事
ゆゑ繰り不審に思ひ又翌年も態と見よ彼うるよ如の
神迎の儀を濃へ神を降ずるに必ず落風して
おそ亜ものの如く実に神人を宮中へ引揚彼者さも
前年に少も違の事の如く長くも不思議なる神事と
異り必亜ことも平生を貴賤を見ざるハ何も多業
今一入恐り知居る人よ少なやく年来おそ亜よ平ず
入魂ちうふ期日七夜間ハ上有初の産より也神中美流也

乃事能知居る人敬ひ事業るべし〳〵と〳〵以能態〳〵尋彩
さらに七五調ハ格別の酒好故面倉もてる〳〵事よ酒を
出し〳〵置の数も重ね折長ハ乃須原乃神事の後とや
ゞ〳〵敬りらゞよ同り七五調ハ云ふを須原の神事ハ
各別乃後〳〵中〳〵格の酒席ゆ〳〵ゝ出し〳〵事
ゆ〳〵ハ彩〳〵と清の席と西爰〳〵四拍子中さゝバ
勿論なく神恵も量り業実よ恐爰神事ハ四度ハ
去すゞ〳〵の神事ハ清吐〳〵中り中〳〵ハ中〳〵多り中
さゞ現去乃事を四度なる〳〵ハ知ちゝさゞ明る
事に四度ハ〳〵清り業〳〵も篤〳〵吹行ちよ神豆
三人有　大家大和守宮脇　加賀守　飛騨守　浅野
是と三人元〳〵云文よ先徳さる次友
四人家長と四人元〳〵云合〳〵七人元〳〵各別家掛乃

須原神社

四家乃屋ちゝ乃社家祢宜ハ恵祢ゆ〳〵三四十人も多由
その三人元の内ちゝ人家人ゝ成若三人共文有時ハ四人の内ゝ勤る事もそゝ一月ゝ出日
ゆゝ陰極以前ゝ潔祓〳〵神前と流〳〵祓川　祓水ハ花淳加賀天振乃山〳〵ゝ流る出る水ハ祓水ハ
阿弥陀ヶ滝ゝ流る出る水ハ長良川ハ長良川ハ長良の西と流る〳〵桑名ゝ海ゝ入る
峯に御座と清神ひ日〳〵川へ入〳〵垢離とゝり初て祭日ハ
朝ゝ勤〳〵御座乃傍ゝ〳〵ちゝ敷と叩きその右敷ゝ
法〳〵右ゝ氏源西人源〳〵ゝに着ゝりもと組合川へ
ゝ〳〵胸まゞ〳〵水中ゝ入〳〵腰と打右乃氏源まゞ〳〵も
等〳〵天窓とゞ川ゆり水へ突込庭ゝ来ゝ〳〵休息の上
又右乃ゞ〳〵入水もる事度〳〵ゝ疲ゝ入〳〵ハゞん〳〵
右敷も勤〳〵祓敷も世話変ゝ九ッ頃ゝ出ゝて御座へ
帰ゝ〳〵右敷と打ま〳〵無出〳〵入海ゝ〳〵右敷ゆ〳〵無出〳〵

遠り八ツ巳頃より七拾之度水とあび仕候事〳〵氏水と
いのる神も不思議成り頂き歳を祈り申上〳〵
誠に光源院〳〵種〳〵ざる所ゆゑ寒中も南国より
十信〳〵其外さまざまの老人のえ事義へうると
年番り面〳〵ハ親の事ゆゑ〳〵たく〳〵者さ社人そも
其後ハ夢中見給ふ成〳〵氏子より助をらと水中へ流り
迄〳〵も氏子の方〳〵ことに水の中へ天窓と実迄事
うもごと氏子ハ〳〵者〳〵何とも四事成そのうと
代り合〳〵入水をる故その元事より〳〵さらと〳〵玉形を
陸をる者も後より成〳〵を見人〳〵水より入来るをさま
各別の事〳〵假屋より水中へも一二丁もを〳〵を通
巌石ゆ〳〵まと伝ひ〳〵上下をる神も大役実よ事絶
せざるも不思議〳〵相見より神前へ行〳〵左右の方より
神の枝と持〳〵小脇りうゆ迄〳〵神拝〳〵後小のうと
加賀国白山の方に向〳〵神祭と拝ひ遍拝なりと唯一段
ゆ〳〵神風の落事ゆる事もを三日夜も拝〳〵漸〳〵風の
落事ゆる〳〵を〳〵玉落風のをきまざき事ハ夢本も
吹乃行辛も吹光〳〵思ひ強ふる強風ゆ〳〵挑灯神燈
の頂も吹消るとり役衆人夢中ゆ〳〵を〳〵〳〵霊人生
〳〵自然と聞り振ゆ〳〵室へ揚ると大勝の神人小勝り
繕ひ神〳〵もゆり斧よを事〳〵〳〵ゆ〳〵と文を〳〵〳〵と
霊ひをと〳〵〳〵京中へ揚ん〳〵をると前のゆ〳〵大ぜひ
揚〳〵行〳〵〳〵房ぜ〳〵ゆ揚ハ月の毛もゆゆ恐変新神
霊の無難うゆ事ハ元人目の面り拝〳〵ゆゆ事ゆ〳〵

文より行ひも前の如く宮中に揚るとき屋の居る間り
神を揚るのかたや斷祭人も靜まる後のも被神と
揚り居るなりみな中に敬ごる故指一本毎に咒文を
唱へ力を注せむりよりかくるかたち若咒文なりにてこれ
くるくる又恵を指へりて揚り居るよう此指の一事ゆう
みくも思議の事なり此順りもりなる例年ものも
ものくに明治十二月の初日なるなるかの
神の枝を小鋼り揚り迎るなりに見神なるとに爰ひく
踊り揚る故を樂ひよ神の生業ハ一業も詳べ居なる
事明りを之なるなる爰ひ方の事業と云ふ見るべしとの
此一人此神の業を知りて人人雇うべハ即是を居夫
狐狸魔怪の類も畏ぎ居る事故人人事ひ合ひ拾ひ

學劍聲裡掩花翻千
年祠畔別成村滄桐
香水畫圖裏怳惚家
俠骨存養老年來古
冠衣果然強須說且論找陟峻
阪果談辨說破當年蒯垣衍
廟廊門廡莫益治甌窶汙
邪神益顯它日黃金鑄魯連
寧厭往還脚重繭
已爽仲春藤城兄同清泰興
禪二禪師奉 官命屢至洲
原緯紛止訟謀祠宇修繕祠
祝農神祠祝有五十家兄詩
云爾
秋水製圖併識
櫻樹園藏版

濃國洲原太神社之眞景
直宋寫

来る事なり而後式神事ハ現り見ゆさまで神明の
思ひ愛事多り繁る〳〵七夜続て舞を奏〳〵出せ〳〵
前のも云る如り当居行事も神歌を流して落風して来り
月神宮中へ向揚る之さまよ餘り不審故重〳〵の年まと
系譜なり〳〵減るに前年に変る事とて〳〵の之ハ不思議
なる事〳〵中へうりさ式神事ハ毎〳〵深秘なる事
なれ伯人の為る事なれ〳〵ざまとて去伯の中伯よハ
別の白山権現彼山ハ雪深く横り埋故式社へ来り参
なり〳〵四月の祭事にて内りの人〳〵立伯るよう文分
彼祭人ハ男也果〳〵六日より〳〵謝なり〳〵たる也く
一旬も也断元の也りに敬事とて祭神を法神なして
伊勢興の尊なり〳〵小伊勢大神宮を多賀権現の事なり陽神なして

伊奘諾乃尊なるべし夫婦乃御神なるべしましましてとか伝ふる
との事也文化年中乃事とや社家ならびに圍窮によりおよび
此山乃木を山師どもの受負ひて三四百あまりに引渡し
のち木を伐るに悉く底木なるく遍良木も伐出さを
時に折挫じて一本も満足のかなはず請負人大に損失
なせしと定めて神慮に違せさるにや此行ふ事なとか居
さりしに豐葦原乃神事に例年乃如く御輿所より
御輿を昇出さんとせるに大盤石のごとくに如く動かず
のち随人を重りて力業にて出さんとせるに地中へ
生出る如くすこしも動かずしてせんかたなく彼御の
神事なるもむなしく止りしと云来前にかせし如く霊験
新たなる大社乃事故伝向乃輩も多く神事より

遠國よりも人来り群参祭事なれども此年ハ神幸なく
むなしく止るハ彼木を伐る神慮にやと悉く恐れを
なしけりとかや是も七九歳乃熊谷居る乃咄し又あり
神人を天へ引揚らると云事ハ證據なくもなき如く尋
ぬるに右枯のものなれども怪敷事ハ昇りて骨茅苅
の若彼神迎乃神歌を覚え居て敷まり真似をなし
ふかるに忽ち神のうけりありしに天へ引揚行ありしよし
云傳へしも鬼童といへども敷なる此神事乃真似とき
るる事なく恐れ居るとかなり其天へ引揚る様ひ又た
しく引留むるも猶も前乃とかもでごとく現は損し様
ら猶ても中さまで其後も新さたなる神威なりとなそ
尊ぬ所ハ皆身振なしく七九歳乃貝よ語りて能く合点

ものさまの南りはしにまりうる白地に〜感応面あ兼
うり形社殿を安打ようと大神祇ハ養老六年乃頃建て
恭澄大師加賀の國白山を開きさのひ〜右山の絵頂見給
正殿業理姫命右の社を伊勢冊宮右の社ハ大己貴命を
勅請ま〜〜洲原白山大権現〜称〜祭り奉る也源満仲
朝臣因頼光朝臣因頼信朝臣と初〜〜〜南國更任乃
〜〜ハ格かを外去波秋義乃妻家妻織田家三代も信仰
みて田畑を若干寄附もま〜〜うと人ぜ〜一條関白忠良公乃
執　奏ゝん寛和元年　辛酉　六月朔日白山を祭宮〜
勅祭おゝ因年　勅額をも下〜亜を三神を三人の
後ハ信乃黒袍若関も御免り おゝ也時右御額
一條家の御代系〜〜右寄奉勅初下向ま〜拝系ゝて
去給ハ　勅使下向〜中ゝや〜多〜流行歌ゆ〜拝へ
近隣乃老若男女挙〜怪せ〜也ゝ〜ハ〜まり
ゝ時の事を知居る人を〜〜実よ格別乃大社神之
社殿ま〜〜ハ十月晦日乃祭事ハ元和養老の年建産
乃来勅祭仕奉り〜〜云伝ハ兵〜も不思議乃ら
神事乃り

想山著聞奇集巻の四　終